

シンポジウムをきっかけに

東京2020オリンピック・パラリンピックを契機に「かわさきパラムーブメント」を推進する川崎市は、共生社会ホストタウンにも

これは2年前前に開催した「発達障害を手掛かりとした心のバリアフリーシンポジウム」をきっかけに、その時に登壇したJTB、ANA、富士通及び本市とで、その後、後継の場でもこれだけで終わら



川崎市民文化局
オリンピック・パラリンピック推進室・成沢重幸

本連載は「自治体改善マネジメント研究会」のメンバーが執筆しています。同研究会は自治体で改善運動を推進してきた職員と行政経営デザイナー元吉由紀子が共同で設立。実践事例情報を収集、分析し、ナレッジ化して情報発信している。2017年にNPO法人化。ホームページ、Facebook「自治体改善の輪」を運営。

第18回

官民連携で “心のバリアフリー”に 取り組む

認定されている。その取り組みの一端として、官民連携による感覚過敏の特徴を持つ発達障害児を対象とした日本初の「サッカー&ユニバーサルツーリズム」をこの7月に実施した。

せるのではなく、実際にアクションを起こそうと始めた取り組みである。各社のメンバーは概ね実務担当者だったが、シンポジウムに登壇するだけあって、共生社会の実現に向けた熱い思いは共通して

おり、その熱により普通ならあり得ない「ノリ」でコトが始まった。

各社の強みを活かす

プロジェクトは、旅行・航空輸送・ICTといった各社の強みを最大限活かす観点と、発達障害の方の困りごとを少しでも解決する観点から「サッカー&ユニバーサルツーリズム」が企画立案され、当事者、Jリーグ、川崎フロンターレもメンバーに参画した。

企画内容は、川崎フロンターレの試合を安心して観戦できるようなバスでJTBのアテンドにより移送すること、当事者の意見を聞きながらフロンターレの協力により競技場内にセンサリールームを設けること、さらには対戦相手の大分トリニータを応援してもらうべく、大分の方がANAの飛行機に乗って川崎まで旅行してもらうというもの。発達障害の方は、普段の環境と大きく違う飛行機に乗ることに大きな障壁がある場合が多く、また、音や光などに敏感な方にとっては、大音量の競技場の環境そのものがバリアであることなどを踏まえたものである。

参加者がいない？

今回、最も苦労したことの一つに大分からの集客があった。ホームでも観戦が難しいのに、高い旅行代金を払ってまで川崎まで来てくれるのか？という懸念だ。

そこで、ANAは旅行代理店のANAセールスと連携して破格の旅行代金を設定し、本市は同じ共生社会ホストタウンである大分市に出向き、またJリーグは大分トリニータを通じて参加者募集の協力を依頼し、そのほか当事者同士のネットワークも活用するなど、皆が連携してあの手この手で募集を試み、なんとか3組9人の方にお越しいただけた。また、参加者には大変喜んでもらえて私も嬉しく思うとともに安堵したというのが正直なところである。

*

今回、情報共有やプロジェクト管理等の面で、自治体と複数の企業が連携して取り組むことの難しさも実感した。その検証をしっかりと行い、今後も継続させるとともに、川崎からのアウェイツアーの実施など他地域での展開も図っていきたくと考えている。